

「ミドリさん」と 「カラクリ屋敷」に魅せられて

ノンフィクションライター

鈴木 遥さん

平塚の海の近くの住宅街に、屋根から電信柱の突き出た不思議な家が立っている。なぜ屋根から電信柱が突き出ているのだろう？ その真相を突き止めるべく家を訪ねてみると、そこには家に負けないくらいに謎めいたミドリさんというお婆さんが住んでいた…。

私は、「電信柱の突き出た家」の家主である破天荒でユーモアに富んだミドリさんに魅せられて、高校生の時から十数年間、この家に通い続けてきました。それをまとめた物語が『ミドリさんとカラクリ屋敷』という本になって、今月5月26日に集英社から発売されます。ミドリさんのルーツ（北海道開拓の歴史が絡んでいる）を追いながら家の秘密を解き明かしていく、ノンフィクション作品（実話）です。

なぜミドリさんは平塚にやって来て、このような不思議な家を建てたのか？ 取材をしていくうちに一軒の家から日本近代史や開拓史、平塚の生活史のようなものまで浮き彫りになっていきました。その間にも家の中ではミドリさんが消え、さまざま人間模様がくり広げられていきます。私はより深く、この

家の世界観にのめり込んでいきました。

作品は第8回開高健ノンフィクション賞次点作になり、本にするにあたってミドリさんの魅力を引き出そうと、多くの方に尽力していただきました。笑顔のミドリさんが写った本の表紙の写真は、普段はジャニーズの撮影をしているカメラマンさんが「これから六本木で嵐の二宮くん



手作りのワンピースを着たミドリさん



『ミドリさんとカラクリ屋敷』の著者
鈴木 遥さん

私の先祖は江戸時代、平塚の東海道沿いで籠をつくる竹職人だったと言われていました。今ではその場所に往時の面影はまったく留めていませんが、駅周辺の旧街道から一歩それるとのぞかせる、個性豊かな路地の数々は、私にとってお気に入りの風景です。数十年前に失われたはずの地名（住居表示）をかかげた住宅が連なった路地、通るたびに郵便ポストの位置だけが違って景色は昔から変わらない路地…。何度通っても飽きません。個人宅も地中海風にアレンジした家、廃材を外壁にちりばめたユニークな家など、平塚の家は本当に自由だとつくづく思います。高校卒業後、関西を中心に4都市で暮らした上で、平塚に対して強く思っていることの一つです。雑誌の編集・ライターとして「取材して書くこと」が仕事になった私の原点かもしれません。



撮影 亀井重郎

電信柱の突き出た家の縁側で

から平塚に来て、アイドルに引けを取らないベストショットを収めてくださいました。装丁家の鈴木成一さんは印刷の直前まで時間をかけて、建築意匠を本全体に散りばめた、手の込んだ素敵なデザインに仕上げてくださいました。本の帯には、脳科学者の茂木健一郎さんとノンフィクション作家の佐野真一さんからのコメントが付いています。平塚が舞台の作品で、これ以上ない「豪華な本」になりました。

現在 97 歳のミドリさんは、100 歳になったら市から表彰状が貰えることを知ると、「貰えるものは貰っておかなくちゃ。そうしたらみんなでお祝いしよう」と今からすっかりその気になっています。先日、ミドリさんに本の表紙をお披露目するため、編集者やカメラマンさんらが「電信柱の突き出た家」に集まりました。彼女は自分の顔を美人だと絶賛し、「これを見た人は（美人だから）大変なことになるよ」とクレオパトラ並みの影響を予言して、ますます活気付いています。この調子だと 100 歳のお祝い前に、栄誉市民の称号を得ることも夢ではないのでは…。70 歳下の私は本を通じて、平塚からミドリさんの元気と笑いを届ける手助けができればと思っています。

M E S S A G E